

② 高城佐助さん

【廣大難思の大慶喜】

217頁

私が総会所で布教しているとき、上品な長髯の高城老人が熱心に聴聞して下さった。その後彦根、奈良、大阪、神戸付近で布教するときには必ず参詣して下さった。すると他の世話人が「高城君、君は大沼さんを追い廻って聞いているが、あの人は本願寺から睨まれていた問題の人ということを知っているのかい。総会所には、本願寺が全国から選んだ布教使が説教してくださるのだから充分ではないか」「ご注意有り難う。僕のような根性の曲れたものは、どうしても大沼さんの話でなければ納得できないのだから、しばらく成り行きを見ていてくれ給え」と言つて、八十過ぎた老人が三回も八幡まできて下さった。そのとき彼は、私にこういうことを訴えた。

「私(高城)は法門の筋道もよくわかり、他力回向も嘘とは思わないのに、なぜ「はい」と素直に信受することができないのでしょうか」

「それは感情が闇取引をして、観念の遊戯をしているだけです。その場を去ればありがたい心は消えるのです。人間の心は二つありますよ。誰でも心が二つあつてたまるかと思われましようが、上の心は感情、下の心は自性、上の心は、人の前に出たときは体裁をつくらつて人格者らしゆう、賢善精進の相を現じていますが、下の心は虚仮不実、強情我慢な奴です。上の心は猿、はいはいと安請け合いをする番頭、下の心は牛、主人がかぶりを振れば話は崩れるのです。

誰でもお説教を聞きに行くときには、着物を着替えるでしょう。仕事着のなかに久遠劫から流転をする本尊を包んで、衣桁に掛けて留守番さして、よい着物を着てノミも殺さないような殊勝な心で、今日はご信心を頂くのだと、まるで別人のような心で法を聞いています。ずぼらの坊さんも後堂からお説教に出るときだけ、高念仏で威張つて出て、声を張り上げて聖人の苦勞や、継子虐めの話で涙を流さし、義士の仇討ちなどで感激さしたとき、自分も一流の布教使になつて、ご信心を頂

かしたつもり、同行も感激したのでご信心を頂いたつもり、どちらも信仰ではなく感情の話で、信心の受け渡しの闇取引をしているのですから、浄土真宗の信仰でも何でもありません。しかし、それから育ててゆくのです。

自分はどんな心の持ち主か、病氣も知らずに養生もせずに法の尊さを浴びせているだけで、参っているときだけ気持ちがいけれども、家に帰れば本性が牙のむき出しの生活をしているのです。その牙の本性の化け物が照らし出されなければ、仏さまとは一体になられないのです。それに真宗では、その化け物を包むけいこばかりしているのです。

こんな心境は、私が勝手に書いているものではありません。これを間違いと言われる方が間違いで、実地に求道したことがないから知らないのです。聖人が第二十願の信前の人の心境を『化土巻』に、こんなに書いておられます。

「信罪福の心を以て本願力を願求す、教は頓にして根は漸機なり、行は専にして心は雑はる」と言われてありますが、信罪福の心とは自力の替え名で、罪とは十悪五逆、謗法闡提の機です。罪が出てくると法を聞くのに邪魔になるから隠れておれよ。

この心が自力とは誰も知らないのですが、説明しましょうか、悪い心が出ては往生の邪魔になるからおさえ、よい心を見せびらかしてお浄土に参ろうとしている賢善精進の心ではありませんか、知らず知らずの間に、悪い心よりはよい心の方がよいのだと自分で決めている心が、自力の機執ですよ。福とは定散二善、三福九品の総体が福の頂上の名号だから、罪を隠して名号を頂こうとする心、悪を隠して善を表にしようとする、誤魔化そう、繕おう、よい風に装う心が自力ではありませんか。その心で本願力を願求する、本願力は栓じつむれば名号、悪い心を捨てて善い心で名号を頂こうとしている。善人正機になつていませんか、照らし出された絶対の悪が本願の狙いですよ、今の聞き方では悪人正機になつていません。

「教は頓にして根は漸機なり」とは、助けてくださる教えは頓極頓速で聞即信の一念に五十二段を超証さす法であるけれども、根は漸なり 根機はぐずぐずして受け取りきれない疑いがあると知らないから、煩惱は邪魔にならないといいながら、あやぶみがやまないのです。

「行は專にして心は雑る」とは、行は名号一行だから專中の專、真中の真で、絶対純粹至極の善であるけれども、心は雑行雑修の心が淨尽されてないから二の脚をふむと言うのです。他力に眼はついていないけれども、仏智の不思議が心に徹底してないから、心を見ればあやふやで、救われていないからサツパリしないのです。これを信前の機といい、第二十願の桁におるので、聖人はこれを教頓根漸の人といわれ、十八願に到達していないと言われるのです。

真宗の道俗は一人残らず、この信罪福の自力の心でお説教を聞いているのです。」

「私（高城）も、素直に説教を聞いて悦んでいたのです。ところが総会所のお世話をさしていただくようになり、自分の仕合せをよろこんでいたのですが、法のお手元は大丈夫でも、自分の機の手元がどうも淋しくて仕方がない。聞いた教えを取り出しては繕うてみるけれども、書いてあるだけで自分の心には響かない。これが本當の信仰だろうかと危ぶんでみるけれども、どの講師に聞いても、それは煩惱だから気にすることはない。それを見ては千年経つても夜は明けないと言われて、そうかなあと思うけれども、それが疑いとは知らないのです。

ところが、あなたが総会所に來られて、信前信後の水際が立たないのは、話を聞いているだけで救われてはいない、一念の信で仏智が満入するので、それまでは自力の心も疑いの心も何にも知らないで、晴れた真似ばかりしている信前の機で、その機が開発さされた時でなければ十八願に入っていない、法を見てよし機を見てよしでなければ仏凡一体になっていない、撰取されてはいない。機を見ては千年経つても夜は明けないとやっているが、自分の心を見ずにいては万年経つても夜は明けない。無量永劫流転しなければならぬではないか、法に照らされたら機が見えるのは当然ではないか、鏡に向け、姿を見るなどは、馬鹿の言うことだ。見せていただいて、八方塞がりの劣機が自分であることを知らされてこそ、本當に墮ちる、本當に助かる、これで二種深信が徹底するのだと聞かされて、今までは観念の遊戯をしているに過ぎなかった。この方こそ真の知識だ、未来永劫の解決をつけてくださるお方だ、私の悩みを解いてくださる方だと思いました」

「医者いしやは病氣びやうきを見出しみいだしてあげねばなりません、僧侶そうりよは同行どうぎやうの悩みなやの根本こんぽんを見してあげねばなりません。拔苦ぼつく与樂よらくが宗教しゆうきやうであるのに、ご機嫌きげんとる説教せつきやうばかりして、糖尿とうりやう病びやうに砂糖さとうを食たべさす話はなしばかりしているから人間にんげんを墮落だらくさしているのです。光明こうみやう無量むりやうに照てらさるれば、実機じつきが見みえてくるのです。今いままで邪魔じやまにならないと言いっていた煩惱ぼんのうが邪魔じやまになりません。こんな心こころが出るようでは、ひよつと墮おちはせぬか、これでよいだらうかと、自分じぶんの心こころに戻もどって心配しんぱいの出でてくるのはみな疑うたがいのです。だから機きを見るな、機きを見るな、機きを見るものは異安いあん心じんだと恐おそらかして蓋ふたをしているのですから、実機じつきは助たすかってはいません、その心こころが流る転てんをしているのです。

三毒どく五欲よくの煩惱ぼんのうは叢くさむらです。その奥おくに衆生しゆじやう本分ほんぶんの機き、心こころの本尊ほんぞん、難化なんけの三機さんき、難治なんちの三病さんびやう、無明むみやう業障ごうしやうの癌がん、邪見じゃけん、憍慢きやうまん、弊へい、懈怠けたい、梃子ていこでも動かうごかぬ頑迷がんめいの奴やつ、三世ぜの諸仏しよぶつが呆あきれ、八千遍べんの苦勞くろうさしても、十劫じゆう已来このかた立たしても平氣へいきでいる逆謗ぎやくほうの屍しかばねが人間にんげんの本性ほんしやうです。それと一騎きう打ちうちをするのが、第十八願だいいちの若にやく不生ふじやう者じやの誓ちかいです。それにも関かかわらず、十劫じゆうの昔むかしに願行がんぎやうを具足ぐそくして助たすかっているぞと十劫じゆう秘事ひじを教おしえなければ、有象無象うざうむざうがついてこないのです。それから導みちびいてくるのが、第二十願だいいちの法ほうが他力たうりきで機きが自力じりきの方便ほうべんなのです。成就じゆうじゆしている、助たすかっている、死しにさえすれば花降はなふる浄土じやうどとおだてて導みちびくのが調機誘引ちやうきゆういんの方便ほうべんの第二十願だいいちなのです。何年なんねん聞きかされてもハッキリせん、どうも満足まんぞくができないと自分の機きに氣きがついてみると、素直すなおな柄がらでなかった、三千世界ぜんせかいの悪魔あくまの逆謗ぎやくほうの屍しかばねが自分の機きであったと知らされて必死ひつしの求道きゆうどうとなり、若にやく不生ふじやう者じやの念力ねんりきと一騎きう打ちうちをやつて開發かいほつさされたときが十八願じゆはちの身みになった、撰取不捨せんしゆふしやの利益りやくに預あずかつたと言いえるのです。その実機じつきを知しることが難中なんちゆうの難なんであり、その逆謗ぎやくほうの屍しかばねが開發かいほつすることが極難ごくなんの信しんであります。私わたしが開發かいほつさされてみて、十劫じゆう已来このかた立たれたのも、八千遍べんのご苦勞くろうも、三世ぜの諸仏しよぶつの証明しやうめいも嘘うそではなかった、こんな極重ごくじゆうの悪人あくじんとは知らなんだ、これが無条件むじやうけんとは不思議ふしぎのなかの魔訶まか不思議ふしぎ、大歡喜だいかんぎと大懺悔ださいんげになったのです。

聖人しやうにんがあれだけ難むずかしいという文字もじを並ならべておいでになるのに、真宗しんしゆうの僧侶そうりよも俗人ぞくじんも説とき切きらないのは、実地じつちに通とっていない

から説けないのです。難中の難を通っていないから易行の至極を知らない、無眼人無耳人といわなければなりません。あの難の字が易いと読めるのだから、どんなよい眼をしておられるのだろうかと思えます」

「私（高城）は宗教を聞けば聞くほど有難くなれるものかと思つていましたが、ますます悪い心が見えてきます。私は宿善がないのでしようか」

「実地に求道すると、みなその心が見えてくるのです。遠方（えんぼう）のとき（宿善の薄（うす）いとき）は、他人（ひと）の顔（かお）が自分の顔（かお）か判別（はんべつ）がつかない。ハワイに渡航（とこう）した人が友人（ゆうじん）をアパート（たす）に訪ねた。向（む）こうから日本人（にほんじん）がくる。なんと背（せ）の低い、風采（ふうさい）のあがらない人間（げん）か、あれだから世界中（せかいじゅう）の人（ひと）からジャップジャップと馬鹿（ばか）にされるのだ。と思（おも）いつつ歩いてる。喧嘩（けんか）したろうかと右（みぎ）の肩（かた）をちよつと上げたら、先方（せんぼう）もちよつと上げた。この餓鬼（がき）と思（おも）つて見れば、姿見（すがたみ）の鏡（かがみ）に映（うつ）る自分（じぶん）であつた。宗教（しゅうきやう）に接近（せつきん）すればするほど、小皺（こじわ）も痣（あざ）もよく見える、顕微鏡（けんびきやう）で見れば、普通（ふつう）で見えない物がよく見えるでしょう。修養（しゅうやう）や道徳（どうとく）や反省（はんせい）ではよく見えないう罪悪（ざいあく）でも、尽十方無碍光如来（じんじつぱうむげこうにょらい）の光明（こうみやう）に照（て）らされたら、心の髓（すい）の逆謗（ぎやくぼう）の屍（しかばね）が見えるのですが、それが見えないのは鏡（かがみ）が曇（くも）つてゐるか眼病（がんびやう）です。

宗教（しゅうきやう）の聞き始め（はじめ）は、法（ほう）のありがたさばかり聞（き）かされるので、直（す）ぐに有頂天（うちやうてん）になり、海綿（かいめん）が水（みず）を吸（す）い込（こ）むように何もかも身（み）について、何もかも嬉（うれ）しくなつて心多歡喜（しんたかんぎ）の益（やく）のように思（おも）えるのです。縁（えん）が熟（じゆく）してもう離（はな）れないとなると、それからが機（き）が照（て）らし出（だ）されるのです。それを調機（ちようき）誘引（ゆういん）というのです。あれだけ有難（ありがた）かつたのに、あの慶（よろこ）びは何処（どこ）に逃（に）げたか、こんな筈（はず）ではなかつたが、見るなといわれても見（み）ずにはいられなくなつてからが求道（きゆうどう）になるのです。聞（き）けば聞（き）くほど馬鹿（ばか）が見（み）え、真劍（しんけん）になればなるほどテレーツとした心（こころ）が見（み）え、やめるにもやめられず、進（すす）むにも進（すす）まれず、こんな馬鹿（ばか）ではなかつたが、とあせればあせるほど、知らん顔（かお）した心（こころ）が照（て）らしだされて、馬鹿（ばか）か阿呆（あほう）か氣狂（きちが）いか、三千世界（さんせかい）の馬鹿（ばか）者が私（わたし）であつた、聞（き）いたも知（し）つたも信（しん）じたも、ありがたいも嬉（うれ）しいも楽（たの）しいも、みな感情（かんじやう）に騙（だま）されていたのか、何れ（いず）の行（ぎやう）も及（およ）び難（がた）き身（み）であつた、言（い）つてゐることがみ

な心口各異の嘘であり、思っていることがみな妄念煩惱の不実であり、行っていることがみな名利のために狂奔しているのであり、兎の毛の先でついたほど真実らしいものは微塵もないのだ、三千世界の者はみな助かつて、私ひとりには堕ちていかなばならなかつたのだ。自分は宿善が厚いと自惚れていたが、こうまで自惚れとは知らなんだ、言葉の絶えた悪性に驚いたときが、仏さまとは全然反対の絶対悪が照らし出されたのです。仏さまに近寄ろうとして真剣に求道した私が、仏さまに遠ざかり切ったときが「何れの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかし」と往生の望みが切れたときです。絶対の悪と絶対の善、無間のどん底に投げ込まれたが先か、十方法界を全領したのが先か、素直にお聖教を眺めている人たちや観念の遊戯をしている人、机上の空論をしている人たちの窺知するところではありません。不可称不可説不可思議の信樂、三千世界のものはみな堕ちても、私が助からなかつたら不思議の本願が丸潰れ、唯であつた、ただであつた、「唯」という言葉さえもいらぬ唯であつた、極悪最下の機が極善最上の法に生かされたとはこのことか、聖人さま、あなたは七百年の古にこの甚深微妙の法を諦得されたから、八方攻撃のなかに立ちながら、死にゆく人々の批評ぐらいでは後すだりはできない、死なぬ仏と一体になれた嬉しさから大音宣布されたのでございますか。私にこんな自由の天地、広い境地が廻向されようとは夢にも考えではないませんでした。八方塞がりの私が十方法界の功德を全領しようとは、想像もつかないことでした。素直に聞いておいでになる方々には、こんな罪悪のあることをご承知ないから、機を見るものは異安心だと悪口を言っておられるが、こんな罪悪は想像もつかないことです。救われた境地など考えたこともないでしょう。凡智がつきて仏智の不思議に生かされたのですから、境界が違います。信前信後の水際が判然しています。真仮の分際が明瞭に諦得できました。聖人さまで言えば、法然上人のご前に行かれるまでは、無明の闇に閉ざされていたのであり、上人の説法で立ちどころに他力撰生の趣旨を諦得されたときが、凡智がつきて仏智に生かされた信一念の極意であり、帰られるときは晴れ晴れとしてお帰りになったのですから、実時はわからない、用事もないが、晴れたが証拠ですから、行かれるときと帰られるときとの心境は天地の違いがあるのです。

求道もしないで、合点している程度の信仰に、こんな大展開のある筈がありません。あるもないも、その人の信仰の程度で言っているのですから、喧嘩をするものが馬鹿です。

よーしやるぞ、聖人さま、ご安心ください、身命終しか知らない道俗に鉄槌を加えて激励して、廣大難思の大慶喜を獲るように指導さしていただきます。

私がハワイや北米から特招されて行き、信前信後の水際を説き、感情が合点しているのが信前、自性が体験されたのが信後です。名号に調子を合わせて、一体になったものが信後です。法の尊さを話しているのが信前の第二十願で、機の醜さが照らし出されて仏凡一体になったのが第十八願の信後の世界ですと話したら、ある新聞に、「大沼講師の言われるのが本当なら、今までの信者の信仰はみなやり直さねばならないが、どうするか」と書いていましたよ。法を聞いて有難がっているのが第二十願の方便で、実地に求道して開発したのが第十八願の信後の世界になるのです。

今まで聞いたこともなければ、通ったこともない信前信後の道を通らしていただくことは難中の難であり極難の信であります。心も言葉も絶えた言忘慮絶の境地を諦得せよとすすめるのだから、凡夫にそんなことができるかと総攻撃を受けるのは無理ありません。人間の毀誉褒貶はものの数ではありません。仏さまから観音勢至の親友であり、真の仏弟子と讃めらるれば大満足です。」

「私（高城）は、何とした愚か者でしょう。他力廻向他力廻向と思いつつ、私が仏さまに調子を合わせていたのですね」

「それを聖人さまが『凡そ大小聖人一切の善人（素直に聞いていると自惚れているから善人といわれたのです）本願の嘉号を以て己が善根とするが故に（私は素直に名号を聞いているから墮ちないだろうと思う自力廻向の気持ち去らない）、信（他力不思議の信仰）を生ずること能はず。彼の因（名号を成就されたのは悪人正機が原因）を了知すること能はざるが故に報土に入ることなきなり』。まだ自分の本性が見えていない、仏さまの狙いの機が出ていないから一体になることができない

のです。いよいよ調熟の光明で照らし出されて、逆謗の屍が往生の望みが絶えたときが機無であり、仏智が満入したときが円成です。そのとき至心信楽己を忘れて大満足したときが第十八願の信仰、親の念力が衆生のうえに徹底したというのです。

真心徹到する人は

金剛心なりければ

三品の懺悔する人と

ひとしと宗師はのたまえり

親が生きたぞ子がいきたぞ、これを親子の名乗りが挙げたということです」

「私（高城）は二進も三進も動かない、墮ちるままで本願の間に逢うているのですか、無条件とはこのままですか、取ったのやら取られたのやらわからない、これが本願の正客ですか」

「その通りです、念を押すことも何にもいりません。破れたら破れたまま、それが本願の正所被の機です。あなたが目出度く繕うて往生するのなら自力です」

「ああどうしよう、どうしよう、成ろう、なろうとあせつたのが自力でしたか、乱れたら乱れたまま、それが其の儘こいよの勅命と一体でございましたか、親さま親さま、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」と歡喜胸に満ち、おんおん泣いて大喜び、さらに晴れた歡喜の笑顔、踊り舞いして喜ばれました。

帰京されるとき「『浄土真宗の危機、どちらが異安心か』の新しい書物がありましたら一冊くださいませんか、猥下にお逢いするときがありますから、差し上げたいと思います」といわれて、書物を持って嬉々として帰られた。